

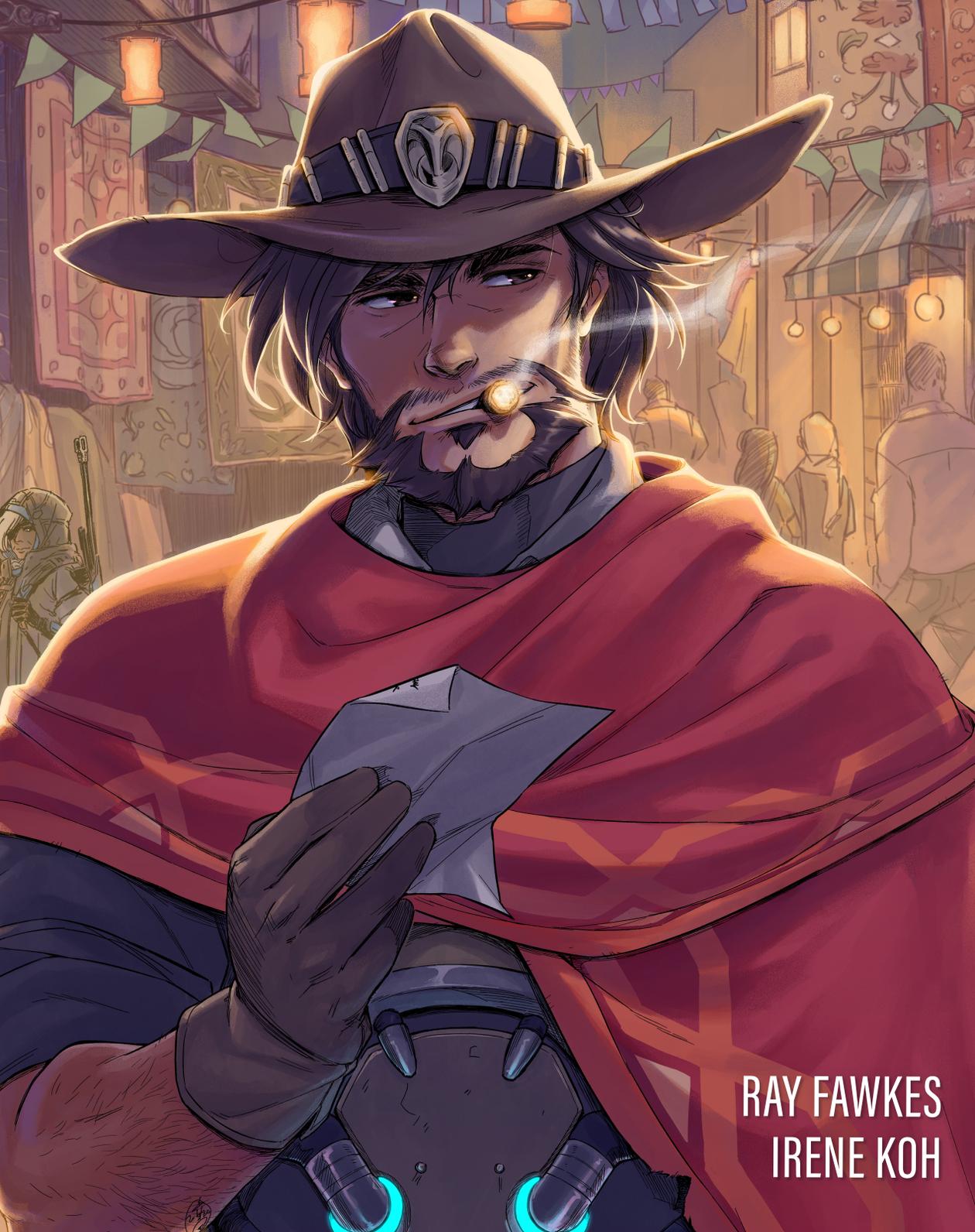


OVERWATCH®

BILZARD
ENTERTAINMENT

第1話
(全5話)

新しい風



RAY FAWKES
IRENE KOH



はじめに.....

このコミックは元々のアートワークの形状を尊重し、英語版のフォーマットで制作されています。読み進める際は、ページ左上のコマから右へとお楽しみください。

新しい風

第1話 (全5話)



OVERWATCH

オーバーウォッチが解体されてから数年後、世の中は不義が蔓延り、私利私欲を求める者たちにより翻弄されていた。混沌と荒廃が世界を蝕む中、コール・キャスディのもとにオーバーウォッチへの再招集を呼びかける通信が入る。しかし、オーバーウォッチ転落の記憶は、今でも呪いのように彼を苦しめていた...

作者 *RAY FAWKES* 日本語翻訳 *NOZOMI OSHIMA* アート *IRENE KOH*
着色 *SUZANNE GEARY* 英語活字デザイン *DERON BENNETT* カバー *IRENE KOH*

DARK HORSE COMICS

プレジデント&パブリッシャー *MIKE RICHARDSON* シニア・エディター *PHILIP R. SIMON* アソシエイト・エディター *JUDY KHUU*
アシスタント・エディター *ROSE WEITZ* デザイナー *PATRICK SATTERFIELD* デジタルアートテクニシャン *ALLYSON HALLER*

BLIZZARD ENTERTAINMENT 編集チーム

リード・エディター *CHLOE FRABONI* プロダクション *FELICE HUANG, BRIANNE MESSINA, DEREK ROSENBERG*
ディレクター、コンシューマープロダクト *BYRON PARNELL* 装丁アート&デザインマネージャー *BETSY PETERSCHMIDT*
クリエイティブコンサルタント *MADI BUCKINGHAM, JEFF CHAMBERLAIN, MICHAEL CHU, SEAN COPELAND, JEFF KAPLAN, AARON KELLER, GEORGE KRSTIC, ARNOLD TSANG, ALYSSA WONG*



Blizzard.com

スペシャルサンクス *DAVID SEEHOLZER*

DarkHorse.com Facebook.com/DarkHorseComics Twitter.com/DarkHorseComics

オーバーウォッチ:新しい風 第1話

Overwatch® © 2021 Blizzard Entertainment, Inc. All rights reserved. Overwatchは米国およびその他の国におけるBlizzard Entertainment, Inc.の商標です。Blizzard Entertainmentは米国およびその他の国におけるBlizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。Dark Horse Comics®およびDark Horseのロゴは、各カテゴリーおよび各国におけるDark Horse Comics LLCの登録商標です。すべての権利はその権利者が所有します。本作品のいかなる部分についても、いかなる手段によっても、Dark Horse Comic LLCの書面による許可なく複製または送信することを禁じます。本作品に登場する名前、キャラクター、場所、出来事は、著者の想像による産物または架空のもので、実在する人物(存命中または故人)、出来事、団体、場所に類似するいかなる描写も、風刺的な意図はなく、偶然によるものです。

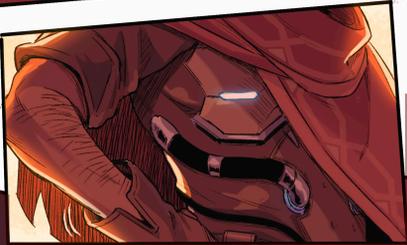
アメリカ合衆国、ルート66

陽は沈みかけてる。
随分長いことそう
してるんだな

仕事は片付けた。が、
何か悩みの種でもできた
みたいだ。また戻って
やる事があるってのかい？

夕日に向かって走り
去っていてもおかしく
ない頃合いだろう





ここに来る前に
こいつを受け
取った

“口上手と
話がしたい”
差出人は
地球の反対側



ここ最近、世界に
降りかかっている事を
考えると…



…何かが起きてる。
それもどデカイ
何かが

雷鳴が轟く中、
お前さんは尻尾を
巻いて逃げるのかい？



まさか

俺も戻ろう
かね。かつて
の仕事に



だが
その前に
こいつだ



世界は地獄に
向かって一直線。
そのタイミングで
この手紙



夕日なら
また
見られるさ…

…今日じゃ
なくともね

エジプト、カイロ







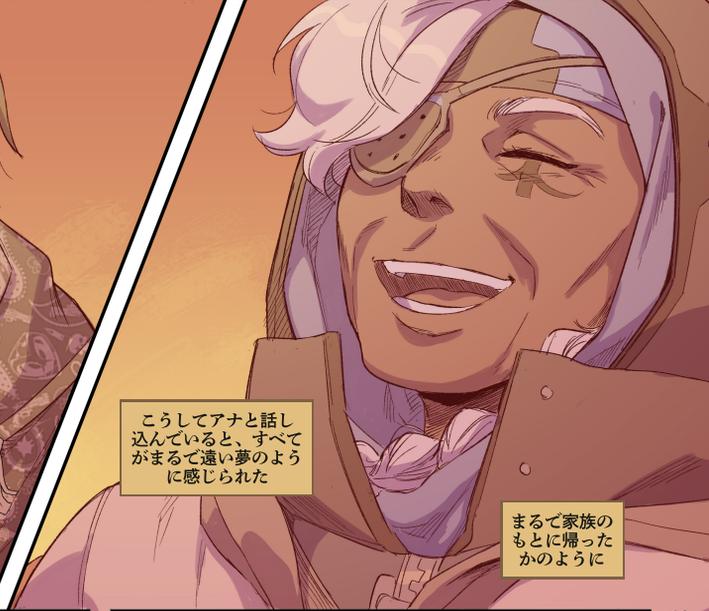
“そなたの話を聞かせてくれ”

そうして始まった茶会は夜深くまで続いた



自分自身大いに変わったし、積もる話は尽きなかった

オーバーウォッチ解散以降は法の目をかくぐって傭兵として奔走し、冷めきった日々を送っていたが…



こうしてアナと話し込んでいると、すべてがまるで遠い夢のように感じられた

まるで家族のもとに帰ったかのように



まるでこれ以上ない程自然な事のように



実際そうなのかもな。すべてはこうであるべきなんだ

お前さんが古き良き日々を想うように、ね…



オーバーウォッチ
の再招集

そなたは
応じるの
だろう？



たぶんな



だがまだ
分かん

アナはどうする？



再招集が発せられて以来
タロンは恐ろしい数の
エージェントを動員して
元オーバーウォッチの
メンバーを狩っている

かつてのウォッチ
ポイント・ジブラルタルの施設
から我々の個人情報盗まれた
という話だ…何を企んで
いるかは知らないが、
オーバーウォッチが復活
しては困るのだろう



ますます
戻らない訳には
いかないな



ここ最近
そなた以外の
かつての仲間
とも会っている

思い出は…
思い出のままに
しておくのが
いいだろう。
老兵は身を
引くべきだ



オーバーウォッチには
リーダーが必要だ。
みんなあんたの
復帰を望むはずさ



本当にそれで
いいと思うか？

過去を繰り返す
ことが？





BANG





しかも
魅力にあふれ、
順応性高く、
可能性を秘めた

BLAM

7時の
奴は
もらったぜ



こちら
は私が

THOK



表には出さ
なかったが
そなたは
がんじがらめ
になっていた

この辺は詳しい
だろう。
どっちに
行けばいい？



こっちだ



ところが
ブラックウォッチに
加わったことで
ますますド壺に
はまっていた



行くぞ!



ブラックウォッチが
過ちを犯した時
すべてがまたそなたの
肩にのしかかってきた。
そして今度は…

アナ、今は
そんな
場合じゃ…



あとどれ
くらいだ?



この広場
の先、
香辛料店
の中

もう
ひと踏ん
張りすれば
終わりだ

離れる
なよ…









私の隠れ家だ。砂漠にもあったが、そちらは見つかってしまったからな。こちらがバックアップだ

実は他にもいくつかあるがね

はは！



タロンのこと、冗談じゃなかったのか

こりゃ何か大きな事態の一端ってことか？



そう考えられる。だがそれが何かは正確には分からない

混沌は混沌を生む。果たしてすべての悪事の裏に糸を引く者がいるのかそれとも日和見主義者が嵐を予見しているだけか……



ジェシー、このデータをそなたに。世界中で起きている脅威についてこちらで把握している情報と、それ以上の詳細が入っている

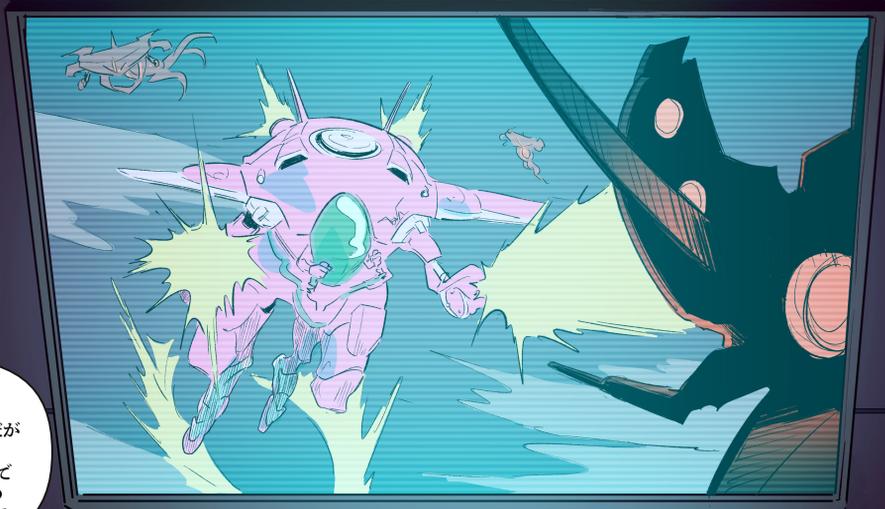
この危機、そして困難。多くの人がそれらに飲み込まれようとしている。だがそれだけじゃない。分かるかい？

ヒーローが
生まれている

世界では並外れた
能力を持つ人々が
必死に戦っている。だが
組織立っていない。
それぞれが地球の隅で
孤軍奮闘し、本来の
力を発揮できずにいる

そなたなら
力を合わせ、勝ち戦
を取りに行く術を
授けることができる

そなたをここへ呼んだのは
誰かが彼らを導かなくては
ならないからだ。この世界を
救うため。より良くするため。
その誰かは、そなただと
確信している





俺が導いたとしたら、
すべて変わっちゃうさ。
かつてのオーバーウォッチも
俺自身も…



それでいい
老兵から引き継げ。
過去から学び、
引きずるな





確かにオーバーウォッチ
には新しい風が必要
なのかもしれない。
正しくあるため、
正しい者たちが



確かに新たなメンバー
をまとめ上げるの
時が来ているの
かもしれない



それに、
確かに…

そいつはお前さんの
役目なの
かもしれない

数日後



地平線上に煙。ヘリックスの警備隊があらゆる可能性にも対応すべくまるで天使のように列を組みそれに応える



その隊列が、最初の一人へと俺を導いてくれるのだらう

正直、アナが彼女をリストに入れるとは驚いた。何も不都合だなんてことじゃない。むしろ彼女ほどの適任者はいない

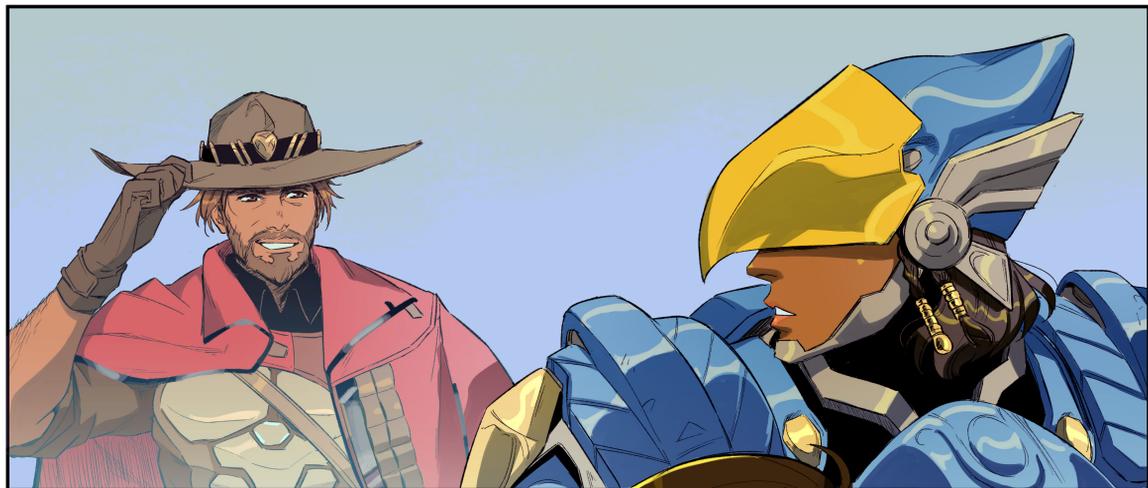


だがいろいろあったからな



ちよいと
いいかい？





なっ…?



こんな所で
何をして
いる？

TO BE CONTINUED



次回

カイロに降り立ったキャストディは、オーバーウォッチに勧誘すべくファラと接触する。だが、母親に対し複雑な想いを抱くファラは、オーバーウォッチへの加入を躊躇っていた。キャストディの仲介により母との再会を果たしたものの、幼い頃の思い出とともに未だ癒えぬ傷が蘇る。敵の奇襲に応じる母娘には、感傷に浸る時間などないのだった。